

# 青雲の果て

— 武人黒田清隆の戦い —

## 第1回

### 奥田 静夫

フリーライター・開拓史研究家

## 第1章 目覚め

### よか二才

江戸末期の天保11年（1840）といえば、長く続いた徳川の世も終わり、明治維新の激動期に突入していく、まさにその前夜である。

この年の7月、清国でアヘン戦争が勃発した。アヘン貿易をめぐる対立していた清国とイギリスの艦隊が、広東港外で砲撃戦を展開したのだ。

戦いの結果は清国の大敗で幕を閉じ、列強の横暴とアジア侵略を内外に強烈に印象づけるものとなった。

この情報はすぐ、長崎港に出入りしているオランダ船を通じ徳川幕府にもたらされた。

幕府はさすがに驚き、同時に自国の将来に深刻な危機感を抱いて、早急に江戸湾警備を固めようと準備を始めた。高名な砲術家（長崎町年寄）の高島秋帆も、やはり同様の懸念を感じ、幕府に



アヘン戦争— 広州を攻撃する英国艦隊と迎え撃つ清国軍艦（東洋文庫蔵）

対して西洋式砲術の採用を建議した。

こうしたなかで、学者や上級武士はもちろん、一般庶民も漠然とではあるが、時代の波を予感し始めたように見えた。

この年の10月16日、鹿児島城下の新屋敷というところで、1人の男の子が誕生した。

この子は黒田清隆（通称了介）と名付けられた。

清隆の父は黒田仲左衛門清行といい、薩摩藩の御小姓組に属していたが、禄高がわずか四石取りという、かなり薄給の下士であった。

母は同じ薩摩藩士丸田平左衛門の娘と伝わっているだけで、この母も清隆が幼いころに亡くなり、清隆には何の思い出もなかった。

清隆は、子供のころから近所で評判になるほどの“元気者”であったが、生活は極端に貧しく、住んでいた家も、壁の破れ目から隣家のともし火が漏れてくるような、古ぼけた長屋であった。そのうえ敷地は排水が悪く、部屋のなかはいつもじめじめしていた。

こうした家庭に生まれ育った清隆には、到底明るい未来が待っているとは思えなかった。

しかし、一縷の希望もないというわけではなかった。そしてその「希望」というものがあるとすれば、それは清隆が生まれた時代と、彼を取り巻く環境の中にこそ見出されるものであろうと思われた。

その当時の薩摩藩には、若者を地域で集団的に鍛え上げる独特の風習があった。これを“郷中教育”といい、6、7歳から14、5歳を稚児組、14、5歳から24、5歳を二才組といった。

それぞれの組には頭がいて統率し、忠孝仁義、質実剛健を目標に、たがいに切磋琢磨して文武に励んだ。

のちに明治維新の立役者となる西郷隆盛（吉之助）、大久保利通（一蔵）をはじめ、大山巖（弥助）、西郷従道（竜介、西郷隆盛の弟）らが育った下加治屋町（現加治屋町）も、すぐ近くであった。

清隆は、こうした特殊な地域環境の中で、仲間との感化を受けながら多感な青春期を過ごしたが、ことに西郷の存在が、清隆に強烈な影響を与えた。

清隆は藩校造士館に学んだ。

ときの薩摩藩主島津斉彬は、名君の誉れの高い人であった。斉彬は、「文字のうえだけの学問に

こだわることなく、幅広い識見を持ち、時勢に役立つ人間を育てることこそが重要だ」という信念を持ち、柔軟で実行力に富んだ人材を養成することに力を入れていた。

こうした藩主の姿勢や造士館の気風は、清隆にとっても心地良かった。

17歳のころ父の清行が亡くなり、万延元年(1860)、20歳のとき藩から三両二人扶持ふたにりを与えられ、砲隊の砲手つなひ(綱曳き)をつとめた。

当時、薩摩藩は海外諸国から近代的な産業機械などを輸入する一方、軍事・化学などの藩直営工場を運営し、大砲の製造なども盛んに行っていた。これらをあわせて「集成館」と称していた。

こうした実績のうえに立って、藩はこの年、小銃隊、大砲隊を中心に、相当大がかりな軍制改革を断行した。砲台の増加、兵員の配備、銃砲の整備、蒸気船の購入などを積極的に行った。

安政5年(1858)7月、斉彬が50歳で急逝すると、斉彬の腹違いの弟久光の子忠義が藩主となり、久光がその後見役となって実権を握った。久光は、斉彬の近代化政策などを継承するとともに、朝廷と幕府の疎遠を憂いて、いわゆる“公武合体”の工作に奔走し始めた。

このころ、大砲の試射は「火通し」といい、この地でかなり人気のある行事であった。砲隊所属の清隆がこの晴れがましい行事に参加すると聞くと、姉のたかは、清隆のために真心を込めて晴れ着を縫い、紅葉入り剥身絞りの派手な兵児帯を整えた。

清隆は、さっそうとこれに身をかためて参加した。数多い若者の中でも彼のきびきびした動作、若武者ぶりは、ひとときわ異彩を放った。

「よか二才にせ、よか二才」

というささやきが、あちこちで沸き起った。

清隆の晴れ舞台登場の首尾は、上々であった。

このときのことは、清隆の脳裏にしっかりと焼きついた。清隆は生涯この衣裳をていねいに保管し、誕生日には必ず取り出して床の間におき、一礼して、

(初心忘れるべからず)

と胸に誓った。また、諸葛孔明しょかつこうめいの「出師の表すいし ひょう」が好きで、ときどき袴はかまをつけて端座し、朗々とこ

れを誦した。

姉のたかが井上貞教に嫁ぐと、清隆はがらんとした長屋にさびしく取り残された。

酒杯を手にし、ひとり飲んで臥した。

ときには大声を発して自分を激励し、また時勢を嘆いた。

抜刀して舞いもした。そのときの刀痕は、部屋の柱に残った。

その若くたくましい肉体には満々たる活力が溢れ、その目はたえずおのれの未来を見つめていた。

いや、未来に羽ばたくおのれの姿を夢見ていた、という方が正しいだろう。

(俺は必ずこのみじめな暮らしから脱け出し、世に名を残す人物になる。絶対に下士などで終わるものか)

#### 生麦事件起きる

大老井伊直弼なおすけの暗殺事件(「桜田門外の変」)から2年を経た文久2年(1862)3月、島津久光は千人あまりの薩摩藩兵を率いて鹿児島を出発し、京都に上った。

4月、京都に着いた久光は、藩内尊攘過激派の有馬新七、田中謙助、柴山愛次郎らを伏見寺田屋に襲って、これを肅清した。次いで朝廷から幕政改革の勅命を得ると、剛直な人柄で知られる勅使大原重徳しげのり(公家)を護衛して江戸に下り、幕府に対し攘夷を命じ、一橋慶喜よしのぶを將軍後見役、松平慶永なが しゅんがく(春嶽)を政事総裁職しきに就けるなどの改革を実行させた。

任を終えた久光は、8月に江戸を発ち、再び京



生麦事件図(英人ワーグマン画。横浜開港資料館蔵)

都に向かった。この一行の行列には、21歳の清隆も、供侍として加わっていた。

「生麦事件」<sup>なまむぎ</sup>が起きたのは、その直後のことである。

久光の一行は、午後2時ころ武蔵国生麦村（現横浜市）にさしかかった。そこへたまたま馬に乗った上海在住の商人リチャードソン、香港在留商人の妻ボロデール夫人、2人を案内する横浜在留のマーシャル、クラークら4人のイギリス人一行が通りかかり、行列の先頭と鉢合わせをした。

彼ら四人は、避暑と観光のため来日していたのだが、

「下に、下に」

という行列の前触れの意味がわからず、下馬しなかった。

「無礼者め」

怒った供の奈良原喜左衛門らは、抜刀して小走りに駆け寄り、いきなりこの異国人たちに斬りかかった。この奈良原は、自顕流薬丸派の剣の達人であった。

清隆は、血気にはやって刀を抜きかけていた他の藩士に対し、

「馬鹿なことをするな」

と叫んで鎧（刀の鞘の末端）<sup>こじり</sup>を引いて止めた。（「史談会速記録」市来四郎談）また同僚の本田源吾とともに疾駆して、事態を供頭の海江田武次（信義）に伝えたりして動いた。（近習の松方正義談。徳富蘇峰著「松方正義伝・乾」）

彼は、こうしたとっさの事件などにも冷静に対処できる若者に成長していた。

しかし、もはや事件の流れは止まらなかった。

リチャードソンは死亡し、マーシャル、クラークの二人は負傷して神奈川宿のアメリカ領事館（本覚寺）<sup>ほんかくじ</sup>に逃れた。ボロデール夫人は半狂乱のまま馬を走らせ、ようやくのことで横浜の居留地に逃げ込んだ。

ことは薩摩藩とイギリス間、果ては幕府とイギリス間の大きな国際紛争に発展していった。

イギリスの駐日公使館には、代理公使のジョン・ニールがいた。

ニールは幕府に対し10万ポンドの賠償支払いを要求、薩摩藩に対しても下手人の逮捕、処刑と慰謝料2万5千ポンドの支払いを強硬に迫った。

結局、幕府はしぶしぶ10万ポンドを支払ったが、薩摩藩はかたくなに要求を拒否した。

### 薩英戦争で目覚める

幕府が朝廷に約束した攘夷の決行期限日に当たる文久3年（1863）5月10日の深夜、下関海峡で風雨を避け、順潮を待っていたアメリカ商船ペンブロック号に、久坂玄瑞らが乗り込んだ長州藩の庚申丸と葵亥丸が接近し、突然、砲撃を加えた。

「下関事件」の勃発である。

ペンブロック号は、辛くも豊後水道方面に逃げ切った。

長州藩は、23日にフランス軍艦キンシャン号、26日にはオランダ軍艦メジュサ号に砲撃を加え、それぞれ数人の死傷者が出た。

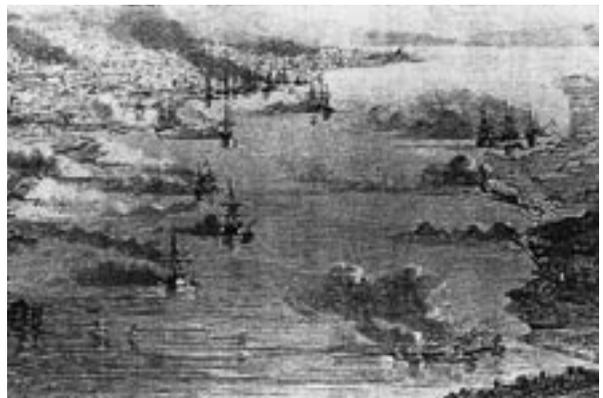
6月1日には、アメリカ軍艦ワイオミング号に砲撃を浴びせたが、同艦は猛反撃し、長州藩の亀山砲台を破壊させたばかりか、庚申丸、壬戌丸の両艦を撃沈、葵丑丸を大破させた。

5日、フランス艦隊が長州藩に対する報復攻撃を開始し、陸戦隊250人を上陸させて前田、壇ノ浦の長州藩砲台を破壊した。

しかし長州藩は24日、対岸にある小倉藩田野浦を占拠し、砲台を築造して、引き続き下関海峡の通行妨害を続けた。

ここに来て列国は、幕府に対して長州藩への処罰、瀬戸内海の航行の自由、艦船損傷の賠償などを強硬に要求した。

この交渉は長引き、翌年8月、ついにイギリス、アメリカ、フランス、オランダ4カ国連合艦隊の下関攻撃（「下関戦争」）という異常事態に発展し



フランスの新聞「ル・モンド・イリュストレ」に載った薩英戦争（横浜開港資料館蔵）

ていく。

下関事件が世の中を騒がせている最中の6月27日、今度はイギリス艦隊の7隻が鹿児島湾の錦江湾に姿を現わした。薩摩藩に対して前年に起きた生麦事件についての陳謝、犯人処罰、賠償金の支払などを実行させるためである。

しかし、薩摩藩は依然、要求拒否の態度を変えなかった。

イギリス艦隊は、7月2日未明、ついに実力行使に出て、薩摩藩の汽船3隻を拿捕した。同艦隊はクーパー提督の指揮のもと、旗艦ユーリアラス号以下7隻で編成され、大砲89門を備えた大艦隊で、イギリス代理公使ニールも座乗していた。

このとき薩摩藩は船奉行五代友厚、乗頭松木弘庵（寺島宗則）らが捕虜となった。

これが千眼寺にある薩摩藩本営に急報されると、同藩の藩士たちはいきり立ち、この日正午、イギリス艦隊に対して猛烈な砲撃を加えた。22才の青年清隆も、砲手としてこの戦争に参加した。

本格的な戦争がここに始まった。（「薩英戦争」）  
両軍の戦闘は熾烈を極めた。清隆は敵艦乗っ取りの決死隊の一員にも加わって活躍した。

しかし、薩摩側の10カ所の台場にある大砲85門は、主力が10ポンド砲や24ポンド砲で、施条砲は皆無であり、射程距離はいずれも1キロメートル程度であった。これに対し、イギリス側の艦船は大砲101門を備え、中には射程距離が4キロメートルに及ぶ最新の110ポンド・アームストロング砲もあった。

このため薩摩藩の砲台のほとんどと、藩直営工場の集成館が壊滅的な打撃を受け、停泊中の船も焼かれた。城下の500戸もの民家や寺社が焼失し、戦死者5人、負傷者10数人を出した。

薩摩藩の敗北の代償は、余りにも大きかった。

ただイギリス側でも、多分に薩摩藩を見くびっていたため、旗艦ユーリアラス号に直撃弾を受けるなどしたうえに台風下で進退に困難があり、各艦とも被害を受けて60余人もの死傷者を出した。このうち死者は13人で、この中には艦長ジョスリング大佐、副艦長ウィルモット中佐が含まれていた。

また弾薬・食糧・燃料の準備が万全でなかった。

このためイギリス艦隊は、さしたる成果も挙げられないまま錦江湾を去り、戦争は終わった。

9月以降、イギリスと薩摩藩との講和交渉が進められ、11月1日、薩摩藩は2万5千ポンド（10万ドル）の賠償金を支払い、生麦事件の犯人を逮捕・処罰することを確約した。

この戦いで薩摩藩は、今さらながら攘夷の愚かさに気付き、これ以降、欧米の軍事技術をより積極的に取り入れる方向に、大きく舵を切った。

清隆自身も、今回の戦いで、深く感じるころがあった。おぼろげながら、海外情勢や日本と外国との関係、国力といったことに、目覚めたのである。

（世界は広い。欧米の産業や軍事技術は、こちらとは比較にならないほど優れている。このままでは日本の将来は危ない。自分も海外留学の道を真剣に探らなくては…）

戦争直後の8月、天保山沖の神瀬に新しい砲台を築くことになったが、このとき清隆は、川村純義（一郎）、大山巖らの藩内有志108人とともに連署して、

「この砲台の築造にぜひ協力したい」

と藩に申し出ている。

こうした流れの中で、薩摩藩内では久光側近の公武合体派が退けられ、代って小松帯刀、西郷隆盛、大久保利通らの反幕府開明派が実権を握り、藩政をリードするようになった。

また、のちのことであるが、この薩英戦争でアームストロング砲の威力に悩まされた清隆は、欧州を旅行した際、とくに希望してライン河畔のアームストロング工場に立ち寄り、じっくり視察している。

---

## profile

**奥田 静夫** おくだしずお

1943年福井県生まれ。金沢大学法文卒。北海道開発局官房長、(社)北海道建設業協会専務理事を経て、フリーライター・開拓史研究家。一道塾会員。札幌市在住。2006年3月、「魂を燃焼し尽くした男―松本十郎の生涯」で第26回北海道ノンフィクション大賞受賞（雑誌「クオリティ」同年4～12月号連載）。

---